

雨知らずの紫陽花

1mm

貴方がいるから私は今日も、本当の私に戻れない。

[雨知らずの紫陽花]

- 晴れ。雲は見えない。風が涼しい。 -

幼い人に仕えている。

邸に入ってから三年。その人を護るために雇われ、その人のために日々を過ごす。そういう立場にいることを許されていた。

常に「一緒に」いると言うのではなく、常に「お傍に」いると言うのが正しいだろう。身の周りのお世話や相手をするのが主ではない。自分の仕事は、その人のことでありながら、その人から一步離れたところにいる、そういう感覚の立ち位置にあるものだ。

だというのに。

「涼、」

「涼、」

ああ、毎日毎日、幾度も幾度も。

その人は、私と言葉を交わすことを求めてくるのだ。ふうわりと、綿のような笑顔で、いつも。

私の立ち位置上、私に対してその様に親しく求めてくることを、諫めたこともある。私から直接は何度か。私のその様子を見た世話の者からも、口添えに一度。

しかしその人は諫める度に、

「どうしてその様な理由を付けるの。嫌だわ」

と、目を丸くして、またふうわりと笑って聞かなかったことにするのだ。

世話の者も皆、一応口を添えはするものの実際は「鞠華様がそう仰ることですし、固くならずいいではないですか」と笑っている。

嘆息。

ああ、そうだから今日も。

「涼、」

「……はい、お嬢様」

そのふわふわした笑みに、離れた一步を跨いで来られるのだ。

*

-曇りのち晴れ。風がやや強い。-

「大切にしたいものを考えなさい、ですって」

窓辺に腰掛けて、彼女はぽそりと呟いた。

珍しい顔。最近、子どもではなくなってきたのだと、成長をそうして表情で見取れることが多くなった。社交場に出なければならないことが増えて、自分の邸の中だけでは知れないことを多く学び始めているのだろうと思う。こそばゆく感じて、よく分からないそれに内心でそっと笑

うのだった。

ちなみに、そう言われていたことは、役目として付き添っていた自分も勿論聞いていた。彼女は、それを大事なこととしてしっかり考えようとしているのだ。

だから。

(だから、こういう気持ちになるのだ、)

目元が和らぐのが、自分でも分かる。勿論此方を見ていたお嬢様には気付かれて、むうとされる。

「もう。真面目に考えているのよ、私は。どうして笑うの」

「嬉しいからですよ、お嬢様」

貴方が素敵な大人になっていくのが。嬉しく、寂しい。

「……好きなものが大切なもの、じゃ、駄目なのかしら」

窓の外へ顔を向けて。その表情は見えないけれど、きっと曇っているから。

「駄目ではありませんよ。ただ、全てを腕に抱えることは難しいかもしれませんね、というお話です、あれは」

自分で、自分がそれらを守れるように。自分の手に余して、大切にできないことにならないように。

そうね、

お嬢様はふうと溜息をついて。

「私、涼のこと大好きよ。大切にしたいわ」

此方にもう一度向いた顔は、もういつもの笑顔。ふうわりと、

ああもう、本当に貴方は。そうだから、私は。

苦笑して。

「……でも、私のことは護らなくていいのですよ。だから、他に大切にしたいものを、もっと考えることです」

私が貴方を護るのだから。

*

-晴れ。雲は薄く穏やかな空、風は無い。-

「涼は、本当に私の名を呼んでくれないのね」

忘れた頃に、お嬢様は非日常的なそれを思い出してくる。

お嬢様のことを、私は「鞠華様」と御名前と呼んだことがない。一度も。自分だけが、お嬢様を常に御名前では呼ばない。

何故なら。

「不公平ではないですか、その様なこと。私にあまりにもしあわせなことになります」

「涼の本当の名前は、まだ、呼ばせてくれないのね」

自分の名を、誰にも教えていないからだ。「涼」という字で自分を呼び始めたのは、お嬢様だった。

そっと、笑って。

「……お嬢様になら。お嬢様が亡くなる直前に教えて差し上げますよ」

「なあに、それ。じゃあ、涼が先に死んでしまったら教えてもらえないじゃない」

むくれた顔。しかし、主に仮にも死の話振ったというのにこの人は本当に、そういうことを気にしない。

「お嬢様が生きている間はずっとお守りしますよ。必ず、です。お嬢様より先には絶対死にませんから」

寿命というものは、誰にも、定められるものではないのですよ。

なあに、それ。二度目のそれは、笑みを含んでいた。

貴方なら。貴方だから。

最初からがらりと思惑は変わってしまったけれど……貴方だから、貴方がその生を綺麗に終わるまで。待とうと。護ろうと。

(ああ、)

苦笑してしまう。貴方がそうだから、私は当分、本当の私に戻れないのだ。

(戻らない、だな)

(そして最期、戻ったとしても、貴方の魂は、私が。)

お前は本っ当に仕方がない、と。心底呆れた声で呟き、溜息を吐いた魔王様を思い出して、また苦笑したけれど。

大切にしたいもの。いつかお嬢様が考えていたそれが、自分にとってお嬢様になってしまったのだから。

ああ、本当に。

仕方がないな、と、穏やかに。

*

美味しく刈り取る為に育て始めた魂に、囚われてしまった死神。

(2058文字)